

原著論文

現代青年における自己の多元性とアイデンティティの関連
—仮面性尺度の作成と青年の類型化—稲塚 葉子¹⁾, 中村佐都子²⁾Multiplicity of Self and Identity in Contemporary Youth:
Development of the Masked Self Scale and Youth Typology

Yoko Inazuka and Satoko Nakamura

This study examined the relationships between multiplicity of self, identity, and psychosocial adjustment in female university students. First, to capture the characteristics of a multifaceted self, we developed a new Masked Self Scale and evaluated its reliability. To further assess its validity and utility, we compared it with scales from previous research. Using the three factor scores of the Self-Plurality Scale (Fujino, 2022) together with the Masked Self Scale score, cluster analysis identified four groups: the Masked Multiplicity Group, the Natural Multiplicity Group, the Unitary Self Group, and the Average Group. One-way ANOVAs were then conducted with cluster membership as the independent variable and MEIS scores and sense of social adjustment as dependent variables. The results showed that the Unitary Self Group and the Natural Multiplicity Group had significantly higher identity and adjustment scores, whereas the Masked Multiplicity Group had significantly lower scores. These findings suggest the existence of an adaptive group with a multifaceted self and offer new insights into identity formation among contemporary youth.

キーワード：自己の多元性，仮面性尺度，アイデンティティ，現代青年

1. 問題と目的

1. 青年期とアイデンティティ形成

青年期は、「自分とは何者か」という問いが生じ、多様な対人経験や役割実験を通して「自分らしさ」を模索する時期である。Erikson (1959 西平・中島訳, 2011)¹⁾は、青年が社会の中で自らの適所を見出し、内的な同一性を確立すると同時に、社会的関係において他者からの承認を得ることで外的な同一性を形成していくと述べている。Erikson のアイデンティティ論では、自己の斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) が重要な要素とされる。斉一性とは、自分自身の認識においても、社会的関係の中においても、自分が一つの存在として「同じ」であるという感覚を指す。一方、連続性とは、自己が過去から現在、将来へと連なっており、時間的展望の中で一

貫した自己として認識される感覚を指す。すなわち、場面や状況により価値観や行動の根本的方向性が大きく変わることをない整合性を保った「一貫した自己」の形成が、青年期の発達課題として重視されてきた。

しかしながら、インターネットや SNS の普及により、現代青年をとりまく対人関係は大きく変化している。人々は複数のコミュニティに同時に属し、匿名性が担保された環境においては、情報発信や意見表明、感情表出が容易になり、自己呈示や自己表出の形態は多様化している。このような社会的環境は、個人が状況や関係に応じて異なる自己を使い分ける契機を与え、従来想定されてきた「一貫した自己」像に再検討を促している。

2. 多元的自己の出現とその社会的背景

近年の青年研究では、状況や関係に応じて異なる自己を使い分ける傾向が指摘されている。浅野 (2015)²⁾は、現代の友人関係を「状況志向的」と捉え、大谷 (2007)³⁾は、友人関係において交流相手を切り替える「対象切替」と、複数の自己を切り替える「自己切替」という二側面を明らかにしている。辻 (2004)⁴⁾は、このような柔軟な

1) 京都女子大学心理共生学部

inaduka@kyoto-wu.ac.jp

Faculty of Psychology and Collaboration, Kyoto Women's University

2) 丸三証券株式会社

Marusan Securities Co., Ltd.

自己を「多元的自我」と定義し、一貫した自我構造をもつ「一元的自我」と区別している。「多元的自我」をもつ個人は、異なる対人状況において変化する複数の自己を有しながらも、各場面で自分らしさを感じているとされる。

岩田（2006）⁵⁾は、1990年代から2000年代にかけての若者の自己意識を比較し、「自己一貫性志向」の低下と「自分らしさ」を有するとする者の減少を見出している。この変化は、従来の枠組みでは、アイデンティティ形成の未熟化と捉えられるが、一方で「自己喪失感」や「自己拡散」の指標には変化は認められない。ここから、岩田（2006）は、青年期の自己形成において「自己の一貫性」が以前ほど重視されなくなっていると指摘している。さらに、岩田（2006）は、若者の自己の多元性を「状況性」（場面による自己の違い）、「戦略性」（意識的な自己の使い分け）、「仮面性」（うわべの・演技的側面）の三側面から分類し、「戦略性」や「仮面性」の有無により自己拡散意識に差異がみられることを示している。

以上のように、青年期のアイデンティティ形成は、従来の「一貫性」中心の枠組みから、状況や関係に応じて変化する「多元的自己」の理解へと拡張されつつある。次節では、このような背景を踏まえ、青年の自己の多元性とアイデンティティ感覚との関連について、心理学分野の先行研究について整理する。

3. 多元的自己の類型化とアイデンティティ感覚

木谷・岡本（2018）⁶⁾は、Erikson が示したアイデンティティ概念と、現代的な多元的アイデンティティとの相違を次の二点に整理している。第一に、自我の統合機能を前提とするかという点である。Erikson 理論では、自己内に多面的な側面が存在しても、最終的には自我の働きにより一貫した自己に統合されると想定される。一方、辻（2004）のモデルに示されるように、多元的自己においては、自己を一貫したものへと統合する志向が必ずしも前提とされていない。第二に、他者関係を通じた社会的同一性形成のあり方である。Erikson 理論では、役割実験の過程で青年が自分にとって意義ある社会関係や重要な他者を見だし、その集団や他者からの承認を得る経験を通してアイデンティティが確立されるとしている。ここでは、青年が自分に適した「場」を選択することが重視されている。これに対して、多元的自己においては、役割や価値観の異なる他者との関係において、その場に適応する形で自己を変化させながら自己形成を進める点に特徴がある（辻、2004）。

木谷・岡本（2018）は、自己の多面性の有無と精神的

健康の観点から青年を類型化し、「多元的自己群」（複数の自己が存在し抑うつ感が低い）、「自己拡散群」（複数の自己が存在し抑うつ感が高い）、「一元的自己群」（自己が変化せず抑うつ感が低い）の3群を抽出した。その結果、「一元的自己群」は最もアイデンティティ感覚が高く、「自己拡散群」は最も低かった。「多元的自己群」は概ね中間的であるが、「心理社会的同一性」に関しては「一元的自己群」と有意な差がみられなかった。すなわち、多元的自己を有する青年の中にも、一元的的自己をもつ青年と同程度に自己と社会の適応的な結びつきの感覚を有する群が存在することが示されている。さらに、半構造化面接の結果から、「多元的自己群」は集団や状況に応じて自己を変化させるが、一つの場面内では一貫した自己概念を保持していること、異なる自己を並列的に存在させることに違和感を抱いておらず、全体的な統合を強く求めない傾向があることが示唆された。

現代青年の自己の多元性に注目し、より精緻な類型化を試みたのが藤野（2022）⁷⁾の研究である。岩田（2006）は「状況性」「戦略性」「仮面性」の三側面から自己の多元性を整理したが、藤野（2022）は、このうち「状況性」と「戦略性」に焦点を当て、「自己多元性尺度」を作成した。この尺度は「意識的自己切替」「無意識的自己切替」「自己不変」の3因子から構成され、信頼性と妥当性が確認されている。「仮面性」については、うわべだけで演技しているような自己の認識の程度を示す指標とされ、「本来感尺度」（伊藤・児玉、2005）⁸⁾を逆転得点化することで測定された。すなわち、「本来感（逆）」得点が高いことを「仮面性が高い」と定義している。

これらの4変数を用いてクラスター分析を行った結果、以下の4群が抽出された。①「多元本来群」（意識的自己切替と自己不変が高く、仮面性が低い）、②「多元仮面群」（意識的自己切替と仮面性が高く、自己不変が低い）、③「一元的自己群」（自己不変のみ高く、他は低い）、④「多元的自己群」（意識的・無意識的自己切替および仮面性が高く、自己不変が低い）である。「一元的自己群」はErikson（1959）のアイデンティティ概念に相当し、他の3群はいずれも多元的自己であるが、その性質や自己認識のあり方に差異がみられた。

さらに、藤野（2022）は「多次元自我同一性尺度（MEIS）」（谷、2001）⁹⁾を用いて群間比較を行い、「一元的自己群」がアイデンティティ感覚が最も高く、次いで「多元本来群」が高いことを示した。下位尺度の一部については、「多元本来群」は「一元的自己群」と同等の水準を示している。一方、「多元仮面群」と「多元的自己群」は、全般的にアイデンティティ感覚が低い。これらの結

果から、多元的な自己を有しており、かつ高い社会的適応を示す群(多元本来群)の存在を明らかにした。

一方で、藤野(2022)は研究の課題として「仮面性」の測定方法を挙げている。本来感の低さを仮面性の高さとなす操作的定義には、両概念の意味的ずれが含まれる可能性があるとし、「仮面性」そのものを直接測定する必要性について言及している。また、亀田(2023)¹⁰⁾は、「本来感」は「仮面性」よりも抽象度が高い概念であり、測定範囲も広いと指摘している。

以上の研究から、多元的自己は一様に不安定な自己を意味するものではなく、そのあり方により心理的適応やアイデンティティ感覚に差異があるといえる。とりわけ「仮面性」は、多元的自己と適応の関連を理解する上で鍵となる概念であり、その適切な測定と理論的定義が今後の課題として重要である。「仮面性」の定義については、先行研究では明確には定められていない。本研究では、岩田(2006)を参照し、「うわべだけで演技をしているような部分を意識し、仮面のような自分を感じる」と定義する。

なお、従来の研究では、青年期の適応はアイデンティティ感覚の強さに大きく依存するとされてきたが、自己が多元的になると、アイデンティティ感覚が高いということのみで適応の程度を評価することには検討の余地がある。どのような自己のあり方が適応的であるのかについてより広い観点から捉えるために、広い意味での社会に対する適応感を指標に据えて検討する必要がある。

以上のような知見と問題意識を踏まえ、本研究の目的は、次の二点である。第一に、現代青年の自己の多元性を理解する上で鍵概念である「仮面性」について、直接的に測定する新しい尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証する。第二に、作成した“仮面性尺度”と自己多元性尺度(藤野, 2022)を用いて青年の自己の類型化を行い、各類型におけるアイデンティティ感覚と社会的適応感の特徴を明らかにする。これにより、青年の多元的自己が必ずしも不適応につながるわけではなく、むしろ適応的に機能する類型が存在する可能性を検討する。

II. 方法

1. 調査対象者

2024年7月に、関西圏の女子大学に通う学生を対象として、無記名式の質問紙調査を集団法により実施した。有効回答数は211名で、平均年齢は19.24歳(SD=0.90)であった。調査参加の手続きとして、調査目的や内容、データの匿名性の確保、結果の利用目的、また、体調不

良や心理的負担を感じた場合には回答を中止してよい旨を文書および口頭で説明し、同意を得た者のみを対象とした。

2. 調査内容

- 1) フェイスシート項目 学年および年齢を尋ねた。
- 2) 自己多元性 自己多元性測定尺度(藤野, 2022)を使用した。本尺度は、「意識的自己切替」「無意識的自己切替」「自己不変」の3因子・12項目から構成される。「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。
- 3) 仮面性 本研究のために作成した尺度を使用した。項目は、「うわべだけの対応をすることがある」「自分は仮面をかぶっているようだと感じることがある」「自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある」である。先行研究内の「仮面性」に関する記述が限定的であり、それに基づき項目設定をしたため、尺度の項目数が3項目と少ない。項目内容の妥当性については、臨床心理学を専門とする教員および複数名の学生との協議を経て確認を行った。「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。
- 4) 本来感 本来感尺度(伊藤・小玉, 2005)の7項目を使用した。「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。
- 5) アイデンティティ感覚 多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale: MEIS)(谷, 2001)を使用した。本尺度は、「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4因子・20項目から構成される。「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。
- 6) 適応感 社会に対する適応感尺度(樋口, 2007)¹¹⁾の5項目を用いた。「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

分析には、IBM SPSS Statistics 28を使用した。

III. 結果

1. 仮面性尺度の信頼性および妥当性について

1) 仮面性尺度の主成分分析

「仮面性」を測定する3項目について主成分分析を行ったところ、第1成分の固有値は2.093、因子寄与率は69.767であった。各項目の主成分量は.889～.772と十分な値で、 α 係数は.781であり、一定以上の信頼性が確認された。以上の結果から、尺度の一次元性が確認され、“仮面性尺度”として以下の分析で用いた(表1)。

なお、その他の尺度については信頼性係数を算出し、十分な内的一貫性が確認されたため、加算平均を算出し、各尺度得点とした。その内、本来感得点については、藤野（2022）と同様に逆転化したものを「本来感（逆）」得点とし、「仮面性」得点との構造的差異を捉えることとした。基本統計量を表2に示す。

表1 仮面性尺度の主成分分析結果

仮面性 ($\alpha = .781$)	第1成分
自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある。	.889
自分は仮面をかぶっているようだと感じることがある。	.841
うわべだけの対応をすることがある。	.772
固有値	2.093
寄与率 (%)	69.767

表2 基本統計量

	平均	SD	α
意識的自己切替	3.73	.802	.783
無意識的自己切替	4.04	.721	.852
自己不変	2.30	.853	.854
仮面性	3.66	.930	.779
本来感（逆）	2.91	.809	.860
MEIS 総得点	4.25	.912	.897
自己斉一性・連続性	4.82	1.377	.877
対自的同一性	4.06	1.198	.858
対他的同一性	4.04	1.218	.853
心理社会的同一性	4.15	1.196	.867
適応感	3.48	.844	.852

2) 各変数間の相関分析

各変数間の関連および「仮面性」と「本来感（逆）」の関連の強さを明らかにするために、相関分析を行いピアソンの積率相関係数を求めた。結果を表3に示す。「仮面性」と「本来感（逆）」の間には有意な正の相関がみられた ($r = .447$, $p < .01$)。「仮面性」および「本来感（逆）」

表3 各変数の相関分析結果

	意識的 自己切替	無意識的 自己切替	自己不変	仮面性	本来感 （逆）	MEIS
意識的自己切替						
無意識的自己切替	.579**					
自己不変	-.408**	-.656**				
仮面性	.545**	.441**	-.408**			
本来感（逆）	.252**	.288**	-.503**	.447**		
MEIS	-.273**	-.267**	.347**	-.490**	-.737**	
社会に対する適応感	-.193**	-.174*	.283**	-.354**	-.649**	.691**

** $p < .01$

と「意識的自己切替」「無意識的自己切替」の間にはいずれも有意な正の相関、「自己不変」との間にはいずれも有意な負の相関、「MEIS」「社会に対する適応感」との間にはいずれも有意な負の相関が認められた。

3) 仮面性と本来感（逆）を目的変数とする重回帰分析

「仮面性」と「本来感（逆）」の違いについて明確にするために、両者がいずれの変数との関連がより強いのかを検証するために、「意識的自己切替」「無意識的自己切替」「自己不変」「MEIS」「社会に対する適応感」を説明変数、「仮面性」と「本来感（逆）」をそれぞれ目的変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。結果を表4に示す。

「仮面性」については、モデル全体は有意であり ($F(3,207) = 53.162$, $p < .001$)、決定係数は $R^2 = .427$ であった。「意識的自己切替」が有意な正の影響を、「MEIS」および「自己不変」が有意な負の影響を示した（順に、 $\beta = .401$, $p < .001$; $\beta = -.336$, $p < .001$; $\beta = -.129$, $p < .05$)。「本来感（逆）」については、モデル全体は有意であり ($F(3,207) = 124.859$, $p < .001$)、決定係数は $R^2 = .639$ であった。「MEIS」「自己不変」「社会に対する適応感」が有意な負の影響を示した（順に、 $\beta = -.474$, $p < .001$; $\beta = -.269$, $p < .001$; $\beta = -.245$, $p < .001$)。

多重共線性を確認するために VIF を算出したところ、値は 1.0～2.3 の範囲であり、一般的な基準値を十分に下回っていたため、多重共線性の問題は認められなかった。

表4 仮面性と本来感（逆）を目的変数とする重回帰分析結果

	仮面性得点	本来感（逆）得点
意識的自己切替	.401***	
自己不変	-.129*	-.269***
MEIS 総得点	-.336***	-.474***
社会に対する適応感		-.245***
R^2	.427***	.639***

*** $p < .001$, * $p < .05$

以上の結果より、本研究の第一の目的については、“仮面性尺度”の十分な内的一貫性と一次元性が確認された。また、「本来感（逆）」得点との関連から一定の妥当性が示され、「仮面性」と「本来感（逆）」の構成概念が異なることが示唆された。この結果を受け、以降の分析では、作成した“仮面性尺度”を用いて青年の類型化を行う。

2. 自己多元性および仮面性に基づくクラスター分析

自己の多元性の特徴について青年の類型化を行うため、自己多元性測定尺度の「意識的自己切替」「無意識的自

己切替」,「自己不変」の3得点, および「仮面性」得点を変数として用い, 階層クラスター分析(Ward法・ユークリッド平方距離)を行い, 解釈可能性を考慮した上で, 4クラスターを採用した。

各クラスターの特徴を明らかにするために, 4クラスターを独立変数, 「意識的自己切替」, 「無意識的自己切替」, 「自己不変」, 「仮面性」をそれぞれ従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果, いずれも主効果が有意であった(意識的自己切替: $F(3,207)=64.508$, $p<.001$; 無意識的自己切替: $F(3,207)=118.425$, $p<.001$; 自己不変: $F(3,207)=110.774$, $p<.001$; 仮面性: $F(3,207)=120.512$, $p<.001$)。多重比較(Tukey法)の結果を含め, 分散分析結果を表5に示す。

結果を踏まえ, 各群について以下のように命名した。クラスター1は, 「意識的自己切替」「無意識的自己切替」「仮面性」が顕著に高く, 「自己不変」が顕著に低い。意識的にも無意識的にも自己を振る舞い分けながら, そうした自分のあり方に仮面性を感じていることが窺われるため, 「多元仮面群」と命名した。クラスター2は, 「仮面性」が他群より顕著に低く, 「意識的自己切替」も低い。また, 「無意識的自己切替」は標準化得点に換算するとややマイナスになるものの, 4群の中で平均的な値である。つまり, 意図的な自己切替はしないものの, 場面に応じた無意識的变化は生じており, 自己の一貫性の認識は少ないことが窺われる。自然に変化しており, その認識はあるものの, 変化している自分に対して仮面性は感じていないという特徴があるため, 「自然多元群」と命名した。クラスター3は, 「意識的自己切替」, 「無意識的自己切替」および「仮面性」が全て顕著に低く, 「自己不変」のみが顕著に高い。状況により自己が変化することではなく一貫した自己を有すると考えられるため「一元的自己群」と命名した。クラスター4は, いずれの変数も

平均的であるため, 「平均群」と命名した。各群の度数は, 「多元仮面群」96名, 「自然多元群」17名, 「一元的自己群」17名, 「平均群」81名であった。各群の特徴を図1に示す。

3. 各群のアイデンティティ, 適応感について

4つのクラスターを独立変数とし, MEIS総得点および下位尺度得点, 社会に対する適応感得点をそれぞれ従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果, すべてにおいて主効果が有意であった(MEIS総得点: $F(3,207)=14.231$, $p<.001$; 自己斉一性・連続性: $F(3,207)=9.149$, $p<.001$; 対自的同一性: $F(3,207)=7.448$, $p<.001$; 対他的同一性: $F(3,207)=14.570$, $p<.001$; 心理社会的同一性: $F(3,207)=7.851$, $p<.001$; 適応感: $F(3,207)=8.032$, $p<.001$)。併せて, 適応指標として想定した変数ではないが, 各クラスターの「本来感」の高さの比較を行うため一元配置分散分析を行った。その結果, 主効果が有意であった($F(3,207)=17.734$, $p<.001$)。多重比較(Tukey法)の結果を含め, 分散分析結果を表6に示す。

以上の結果より, 本研究の第二の目的については, 4つの群が抽出され, 群間でアイデンティティ感覚および社会的適応感に有意な差が認められた。これらの知見は, 青年の自己の多元性を理解する上で「仮面性」が重要な指標であることを示すとともに, 多元的自己が一様に不適応をもたらすのではなく, むしろ適応的に機能する群が存在することを示唆するものである。

IV. 考察

1. 仮面性尺度について

「仮面性尺度」は, 主成分分析により一次元性が確認され, 信頼性係数は $\alpha=.781$ であり, 一定以上の内の一貫性が確認された。変数間の相関分析および重回帰分析の結果から, 「仮面性」は「意識的切替」と最も強い結びつきがあり, 一方で「本来感(逆)」は, 適応指標(MEIS・適応感)および「自己不変」との関連が強いことが示された(表4)。「仮面性」と「本来感(逆)」の間には中程度の正の相関があり一定の関連は示されたものの, 重回帰分析の結果の違いは, 両者の測定しているものが異なっていることを明確に示している。「仮面性尺度」は, 場面による意識的な切替の程度や自己切替に対する認識と深く関わっており, 「うわべだけの演技をしているような」自分に対する認識の程度を端的に反映していると考えられる。4クラスター間の「仮面性」得点は, 多元仮

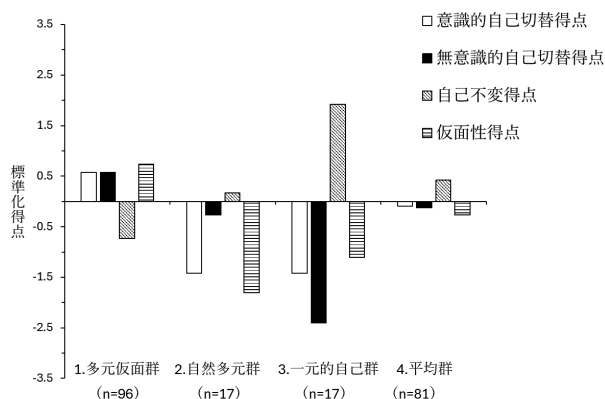


図1 各クラスターの自己多元性得点, 仮面性得点 (標準化得点)

表5 各クラスターの自己多元性得点および仮面性得点

	1. 多元仮面群 (n=96)	2. 自然多元群 (n=17)	3. 一元的自己群 (n=17)	4. 平均群 (n=81)	F 値	多重比較
意識的自己切替	4.19 (.515)	2.59 (.870)	2.59 (.914)	3.66 (.490)	64.508***	1>4>3,2
無意識的自己切替	4.46 (.457)	3.85 (.516)	2.31 (.576)	3.95 (.367)	118.425***	1>4,2>3
自己不変	1.67 (.488)	2.44 (.512)	3.94 (.596)	2.66 (.572)	110.774***	3>4,2>1
仮面性	4.34 (.493)	1.98 (.464)	2.63 (.512)	3.41 (.665)	120.512***	1>4>3>2

*** $p<.001$

表6 各クラスターを要因とした MEIS および適応感の一元配置分散分析結果

	1. 多元仮面群 (n=96)	2. 自然多元群 (n=17)	3. 一元的自己群 (n=17)	4. 平均群 (n=81)	F 値	多重比較
MEIS 総得点	3.90 (.942)	5.04 (.580)	4.81 (.809)	4.39 (.748)	14.231***	2>4,1; 3>1
自己斉一性・連続性	4.38 (1.411)	5.99 (1.001)	5.11 (1.285)	5.02 (1.225)	9.149***	2>3,4,1
対自的同一性	3.69 (1.303)	4.66 (.959)	4.72 (1.325)	4.24 (.923)	7.448***	3,2>1
対他的同一性	3.61 (1.289)	5.12 (.629)	5.01 (.939)	4.12 (.994)	14.570***	2,3>4,1
心理社会的同一性	3.76 (1.246)	4.55 (1.606)	4.87 (1.111)	4.38 (.876)	7.851***	3,2>1
適応感	3.20 (.898)	3.96 (.476)	3.84 (.672)	3.63 (.763)	8.032***	2,3>1
本来感	2.72 (.807)	3.60 (.609)	3.76 (.597)	3.28 (.669)	17.734***	3,2,4>1;3>4

*** $p<.001$

面群，平均群，一元的自己群，自然多元群の順で全ての群間に有意差が認められた。すなわち，“仮面性尺度”は，“仮面性”の高低を差別化する測定尺度として有効と考えられる。藤野（2022）が研究の課題点として挙げているように，“本来感が低いこと”が“仮面性が高いこと”と同等とはいえず，“本来感（逆）”得点で“仮面性”を適切に捉えられていたとはいえないと考えられる。“仮面性尺度”は，自己の多元性を考察する際に重要な鍵となる「仮面性」について，より適切に測定できる有用性のある尺度と考えられる。

2. 青年の類型化と各群の適応感の特徴

本研究では，自己多元性尺度（藤野，2022）と作成した“仮面性尺度”を用いて青年の自己を類型化し，各群におけるアイデンティティ感覚および社会的適応感の特徴を明らかにした。その結果，多元仮面群，自然多元群，一元的自己群，平均群の4つが抽出された。本研究の分類は，藤野（2022）の研究における分類と完全には一致せず，一部異なる特徴をもつ群が抽出された。以下では，その異同も含め，それぞれの群の特徴と理論的意義について考察する。

一元的自己群は，自己を一貫したものとして保持する傾向が強く，一貫した自己に自分らしさを感じている。安定的なアイデンティティ感覚を有しており，適応感が高い。この特徴は，従来のアイデンティティ理論が想定

する「一貫した自己像の確立」と整合的である。本研究では該当者は少数であったものの，藤野（2022）でも同様の特徴を有する群が抽出されており，従来通りのアイデンティティ形成プロセスを辿り，社会への適応に結びついている若者が一定数存在するといえる。

一方で，多元仮面群は，状況に応じて自己を使い分ける傾向が強く，自己を本来のものとして捉える感覚は弱い。「仮面性」が顕著に高く，アイデンティティ感覚や適応感が最も低い群である。藤野（2022）の研究で相対的に度数の多かった多元仮面群や多元的自己群と重なる特徴をもつ。場面に応じて自己切替をし，状況に合わせた自己呈示をするというあり方は，場に合わせて自分を演出しようとする試行錯誤であり，適応のための一方策として生じていると考えられる。しかしながら，それを「仮面」的であると否定的に体験しており，複数の自己が存在することに対して偽りの感覚を有していると考えられる。そこには意識的な葛藤が伴い，安定的なアイデンティティの形成には至らず，心理的適応が不十分であると考えられる。測定方法は異なるものの岩田（2006）で「仮面性」の高い群は，自己拡散意識が高いことが示されたことと重なる結果である。

さらに注目すべきは，自然多元群である。この群は，“意識的自己切替”と“仮面性”が顕著に低いという特徴をもち，“無意識的自己切替”と“自己不変”は平均的である。意図的ではないものの場面や状況により自然に変

化しており、その変化をごく自然なこととして認識しているという点、また、自己の不変性は一元的自己群より有意に低いという点において一元的自己群とは異なっている。本来感得点に着目すると、一元的自己群と同程度に高いことから、変化も含めて自分らしさを感じているといえる。状況に応じて流動的に変化する自己を自然に肯定し安定的な自己感覚を有しており、アイデンティティ感覚と適応感が高い水準で保持されていると考えられる。

一方、平均群の解釈は容易ではない。自己多元性や仮面性の得点はいずれも中間的で、アイデンティティ感覚や適応感も中程度であった。単なる中間群として処理することも可能であるが、この群は、現代青年の過渡的な自己のあり方を反映している可能性がある。平均群の「仮面性」は3.41点であり(得点範囲は1~5点)、多元仮面群ほどは高くはないが、一定以上の「仮面性」を有している(表3)。平均群に該当する者は38%と多く、多元仮面群と平均群を合わせると全体の8割を占めることから、多くの青年が場面による自己切替や自己の変化を認識し、同時にそこに「仮面性」を感じていることがわかる。平均群は、自己の多元性を十分には受容できていないが、同時に一貫性への固執も弱いという点で、発達的に移行的な段階を表していると考えられる。

平均群のように全ての変数が中間に位置する群は、藤野(2022)では認められなかった。また、藤野(2022)の多元本来群(意識的に自己切替をしており多元的でありながら仮面性は低く適応的)は、本研究では認められず、多元的でかつ適応のよい群として自然多元群が見出された。このようなクラスターの違いが生じた理由として、1点目としては、「仮面性」の測定方法が異なることが挙げられる。2点目としては、調査対象者の属性の違いに起因する可能性がある。藤野(2022)では、調査対象者の男女比は概ね同数であり、尺度得点に性差が認められなかったため全体で類型化を行っている。クラスター分析後の各群の男女比が不明であるため推測の域を出ないが、本研究では女性のみを対象としていることがクラスターの違いに影響した可能性は否めない。また、集団内で関係を形成・維持していく際の自己表出の特徴や自己呈示の方略には、所属するコミュニティの特質が深く関連すると考えられる。例えば、集団によって、場面に合わせた自己切替に対する見方や受け容れ方(自己切替は当然とみなすのか、流動的に変わるのはあまり望ましくないと否定的な方向に捉えるか等)の認識の違いがあると考えられる。それゆえ共学か女子大学かといった環境的要因が影響している可能性が考えられる。また、

自己に対する認知機能、自己理解や自己洞察なども母集団によってその特徴に差異があり、結果に影響した可能性が考えられる。

本研究では、アイデンティティ感覚の高低とは別の角度からも適応状態について把握するため、社会に対する適応感を指標として用いた。青年の自己に質的な変化が生じているとすれば、従来のアイデンティティ感覚の高さが、必ずしも安定した適応と結びつかない可能性もあると考えたためである。結果としては、MEISと社会的適応感の間には高い正の関連が認められ、各群の適応感の高低は、アイデンティティ感覚の高低と概ね合致していた。従来版のアイデンティティ感覚が、概ね青年の社会的適応感を表す指標となることが確認された。

3. 現代青年の多元的自己とアイデンティティ形成

従来研究では、青年はモラトリアム期やアイデンティティ拡散の時期を経て、一貫した自己像の確立に至るという発達の過程が想定されてきた。本研究では、多元仮面群・自然多元群・平均群といった自己の多元性を特徴とする群が抽出された。以下では、自己の多元性を有する各群の特徴と発達の位置づけについて考察する。

多元仮面群は、多元的な自己を生きながらも「仮面性」を強く認識しており、安定的な自己感覚を十分に有しているとはいいがたい。この群は全体の約45%を占めており、現代青年に特徴的な自己のあり方を示しているといえる。彼らは、場面や状況に応じて自己を使い分け、他者からの受容や承認を求めながらも、その過程で「演技しているような感覚」や「偽りの自分」という意識を抱えている。この状態は、アイデンティティ形成の途上にあり、他者関係を通して自己を模索するモラトリアム状態、あるいは、自己の一貫性が揺らいだアイデンティティの拡散状態にあると考えられる。

今後の発達の変化としては、少なくとも二つの方向性が想定される。第一に、自己切替の傾向を保持しつつも「仮面性」の意識が徐々に低減し、流動的な自己の中に自分らしさを見出す方向である。これは藤野(2022)の示した「多元本来群」に近い変化である。第二に、意識的な切替が減少し、より自然な形で変化する自己を受容する方向であり、これは本研究の「自然多元群」に見られる特徴である。いずれも、一元的な自己像の確立を最終目標とする従来モデルとは異なるアイデンティティ形成のあり方を示唆している。今後は、多元仮面群の自己切替の傾向や「仮面性」に伴う葛藤が時間経過とともにどのように変化するかについて、縦断的に検討することが求められる。

平均群もまた、自己形成の途上にある群と考えられる。多元性および仮面性の程度は中間的であり、自己のあり方を模索する過渡的段階に位置づけられる可能性がある。今後の変化の方向としては、現状の自己意識を維持する、仮面性の意識が弱まり自然多元群へ移行する、自己変化の程度が減少し一元的自己群へ移行する、といった複数の可能性が考えられる。これらの推移を明らかにするには、縦断的データによる検証が不可欠である。

自然多元群は、本研究で新たに見出された群である。彼らは、場面による自己の流動性を自然なこととして受け入れており、変化する自分に自分らしさを感じている。このような自己の特徴をもつ群が、一元的自己群と同様に高いアイデンティティ感覚と社会的適応感を示したことは、多元的自己が必ずしも不適応をもたらすのではなく、むしろ状況に応じた自己の使い分けが適応的に機能することを示すものである。

多元的自己を有する青年の増加の背景には、人間関係の多層化と同時的な関係維持が進む現代社会の特徴がある。関係性に応じて自己を適切に切り替え、場面に応じて柔軟にふるまうことが対人スキルとして求められる社会においては、このような自己の流動性がむしろ適応的に働くと考えられる。したがって、自然多元群や藤野(2022)の多元本来群に見られるような自己のあり方は、現代社会における適応様式の一つとして位置づけられるであろう。

4. まとめと今後の課題

本研究では、新たに作成した「仮面性尺度」の信頼性と妥当性を検証し、自己多元性および仮面性の組み合わせによって青年の自己を類型化した。その結果、青年は4群に分類され、各群においてアイデンティティ感覚および社会的適応感に差異が認められた。特に、自然多元群の存在は、現代青年が多層的な社会関係の中で、流動性を含み込んだ柔軟なアイデンティティを形成している可能性を示唆するものである。従来の理論が重視してきた「一貫性の獲得」という発達モデルに加え、「多元的自己を自然なものとして受容しつつ安定的なアイデンティティを保持する」という新たな適応の形を提示した点に、本研究の意義があるといえる。

本研究の限界および今後の課題として、以下の4点を挙げる。第一に、研究対象者が女子大学生に限定されていた点である。個人の自己意識には、所属する母集団や社会的文脈の影響が大きいことから、本研究の結果を一般化して論じることには限界がある。今後は、性別や社会的背景の要因を考慮し、調査対象者を拡大して検討を

行う必要がある。

第二に、「仮面性尺度」が3項目と少数の項目で構成されている点である。尺度の精度を高めるためには、項目内容の再検討や増補を通して、より精緻な構成概念の測定が求められる。

第三に、自己類型の発達の变化を明らかにするための縦断的研究の必要性である。大学前半期には、新たな環境において役割や対人関係を模索する段階がみられ、大学後半期には、職業選択という社会課題に直面し、自己表現や自己呈示の方略が問われるようになる。また、卒業から社会への移行期には、役割的自己の比重が高まり、建前と本音の切替を求められる場面が増えると考えられる。したがって、多元的自己を有する者がどのようにアイデンティティを形成し、社会適応へ至るのかについて、発達のプロセスを想定したモデルの提案とその実証的検討が望まれる。

第四に、各群の特徴をより正確に把握するための指標の拡充が挙げられる。本研究では、アイデンティティ感覚および社会的適応感を主な指標として比較を行ったが、今後は、自己評価や自己価値、さらには個人の自己意識特性といった観点を加味することで、各群の自我発達や自己認識の特徴をより多面的に捉えることができると考えている。

以上の点を踏まえ、本研究は「仮面性」という概念を新たに位置づけ、多元的自己とアイデンティティ形成の関連を実証的に検討した初期的段階にある。今後、より多様なサンプルと指標を用いた縦断的研究を通して、現代青年における多元的自己の発達過程と、その適応的機能の実態を解明していくことが期待される。

引用文献

- 1) Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*, New York: W.W.Norton. (エリクソン, E. H. 西平直・中島由恵(訳), アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房, 東京, 2011)
- 2) 浅野智彦 若者とは誰か—アイデンティティの30年【増補新版】, 河出書房新社, 東京, 2015.
- 3) 大谷宗啓 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替—心理的ストレス反応との関連にも注目して— 教育心理学研究, 2007, 55, 480-490.
- 4) 辻大介 若者の親子・友人関係とアイデンティティ—16~17歳を対象としたアンケート調査の結果から— 関西大学社会学部紀要, 2004, 35, 147-159.
- 5) 岩田考 若者のアイデンティティはどう変わったか,

- in 検証・若者の変貌：失われた10年の後に（浅野智彦編）勁草書房，東京，2006，151-186.
- 6) 木谷智子・岡本裕子 自己の多面性とアイデンティティの関連—多元的アイデンティティに注目して— 青年心理学研究，2018，29，91-105.
- 7) 藤野遼平 現代青年における自己の多元性の分類とアイデンティティの関連 青年心理学研究，2022，33，87-104.
- 8) 伊藤正哉・小玉正博 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究，2005，53，74-85.
- 9) 谷冬彦 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成— 教育心理学研究，2001，49，265-273.
- 10) 亀田研 現代青年における自己の多元性の分類とアイデンティティの関連の背景要因 青年心理学研究，2023，34，87-90.
- 11) 樋口康彦 大学生の適応に影響を与える要因に関する考察—ソーシャルスキル，交友関係などの観点から— 国際教養学部紀要，2007，3，97-102.